特立のとりたて副詞「特に」の位置付けと意味用法

－とりたて副詞と程度副詞・叙法副詞・とりたて助詞の関係も視野に入れて－

呉 慶霞

【キーワード】認知的際立ち、集合、離散的範列関係、尺度的範列関係、否定、「は」、「こそ」、「別に」

1 はじめに

特立型のとりたて副詞に分類されている「特に」は例えば「数学が**特に**好きだ」[1]のように、述語の直前に立ち、程度副詞のように見える場合がある。また、「いいえ、**特に**ない」のように、否定文に用いられ、叙法副詞のように見える場合もあり、その位置づけや他の語類との関係が大きな問題となっている。本稿では「特に」の位置づけと意味用法について詳細に分析する。

2 先行研究

先行研究は特立の副詞全体の特徴に関するものと個々の副詞の比較に関するものの二種類に分けられる。前者には工藤（1977）、小林（1987）、日本語記述文法研究会（2009）が、後者には森田（1989）、安部（2006）がある。

まず、工藤（1977）はとりたて副詞[2]を「文中の特定の対象（語句）を、同じ範列に属する他の語とどのような関係にあるかを示しつつ、範列語群の中からとりたてる機能をもつ副詞」(p971)と定義し、それを排他的限定、特立などの8種類に分けている。そのうち、特立については「範列語群の中から特別のものとしてとりたてる」(p975)と規定している。特立のとりたて副詞には「特に・殊に・とりわけ・わけても・なかんずく・なかにも」が挙げられている。これらの語は対象の語句をコレハと排他的にとりたてる場合も、コレコソガと指定的にとりたてる場合もあると指摘する。また、「特に・殊に・とりわけ」の三語について、例えば、「数学が**特に**好きだ」のように、名詞句の後、状態語の前に位置する場合は「数学が**非常に**好きだ」等の程度副詞に近づくと指摘する。小林（1987）は副詞の下位分類の一つとして序列副詞を提案している。序列副詞とは「何番目の位置に順序付けられるかを示す副詞」のことである。そして、

---

[1] 本稿における実例は特に断りのない限り、BCCWJによるものである。出自の記されていない例は作例であり、その自然さの判断は20人の母語話者に協力を得て実施した調査に基づく。調査方法は、各例文について「0」（不自然）から「3」（自然）の4段階で判断してもらった。例文冒頭の記号はその平均値に応じて付している。（0以上1未満：「*」、1以上1.5未満「??」、1.5以上2未満：「?」、2以上3以下：記号なし。）判断のばらつきが大きかった（標準偏差が1以上）ものは例文として使っていない。

[2] 工藤(1977)では「限定副詞」という名称を使用していたが、工藤(1982）では「とりたて副詞」に変更されている。

「特に・殊に・とりわけ・わけても・なかでも・なかんずく」「主に」は「第一番目の位置へ評価付ける」ことを表す序列副詞であると指摘する。日本語記述文法研究会（2009）は「特に・とりわけ・なかでも」をとりたての副詞と位置づけ、その意味を「とりたてられたものを同類のほかのものに比べ、より条件にふさわしいものとして、際立たせるものである」（p16）と規定している。

以上は特立のとりたて副詞全体に関するものであるが、「特に」と類義語の比較を行ったのは森田（1989）と安部（2006）である。森田（1989）では、「『殊に』が対象自体の著しさに対する、かなり客観的な判断であるのに対し、『特に』は話し手の主観的な意見、判断で、話し手の責任において強調する表現である。そのため、『殊に』には見られない、否定表現にも用いられる」（p821）と述べる。しかし、この主観的判断・客観的判断については根拠が提示されていない。また、主観的判断だから否定表現に用いられ、客観的判断だから否定表現に用いられないとする、その論理に疑問が残る。安部（2006）は「特に・殊に・とりわけ」の 3 語に共通する意味は「ある前提を満たす要素の集合の中で、当該要素がその前提を満たすものとして顕著であることを示す」としている。また、「特に」には「特別に」と類似した意味に解釈される（eg.開門前だが、**特に**案内する）という独自の用法が存在すると指摘している。[3]

以上の先行研究には主に次のような問題点がある。①「特に」の副詞体系における位置づけの問題。先行研究では基本的に「特に」をとりたて副詞と位置づけているが、とりたて副詞であることの認定方法は提示されていない。また、「特に」と程度副詞や叙法副詞にどのような関係があるのかについての分析も不十分なものに見える。②「特に」のとりたて体系における位置づけの問題。「特に」は果して工藤（1977）で指摘された排他という他者否定型のとりたて副詞に位置づけられると言えるのか、疑問が残る。③「特に」のとりたて方の問題。「特に」はどんなとりたて方を持っているのか、このとりたて方は構文にどんな影響を与えているのか等についての分析がなされていない。また、その主観性と客観性の問題についても再検討する必要がある。

3 「特に」の位置づけ

本稿ではまず「特に」の位置づけを明確にしておく。本稿は工藤(1977)等の説に賛同し、「特に」をとりたて副詞と位置づける。ただし、工藤(1977)ではなぜそうなのかということについて論証されておらず、とりたて副詞であることの認定方法が提示されていない。本稿では意味機能と統語的特徴の二つの面から論証するが、意味機能をその根本的基準とし、統語的特徴を補助手段として検討する。まず、意味機能の面からの認定として、工藤(1977)の定義から分かるように、範列性を持つかどうかがその語がとりたて副詞であるか否かの決

[3] BCCWJ の例文から見ると、現代ではこの意味で使われる「特に」の例は極めて少ない。

定的要因となる。以下の三つの事象から、「特に」は範列性の存在を前提としているということが証明できる。

まず、「特に」は範列関係の連想しにくい上位概念をとりたてることはない。

(1)a*世界は**特に**広い。無限の可能性がある。[4]

cf.世界は**とても**広い。無限の可能性がある。

b 中葉性の中垂葉。葉形は中ほどが**特に**広い達磨葉で、肉厚。葉色は浅黄地で、葉つやがよい。（『新しい春蘭』）

(1a)の「世界」は抽象的な上位概念として使われており、それと対比される他者が連想しにくい。これに対し、(1b)の「中ほど」は範列関係が連想しやすい。そのため「特に」は(1a)のような文では用いられず、(1b)では使用できる。

次に、「特に」は現場発見的な文や単なる現象文では使いにくい。

(2)*ファイアー・ガールって、熱いどころか**特に**冷たいのか！(cf.こんなに)

(3)*ドアが**特に**閉まっている。

例文(2)は現場発見的文であり、その場での即座の反応を示す場合には他との対比を行う心的余裕はない。(3)は単なる現象文であり、明確な範列関係の存在を前提としない。このような文では「特に」を使うことができない。

第三に、BCCWJにおいては「特に」が他人の感情との対比を暗示する形容詞文で使われる例がない。

(4)a*（クラスの中で）**特に**私が嬉しい。[5]

b 今日は**特に**嬉しかった。

(4a)のような文では「特に」は使われないように思われる。それは「特に」は範列の存在を前提とするため、これを使うと、「私」と対比される他の人の感情まで断定して述べてしまうことになる。しかし、他人が嬉しいかどうか、どれほど嬉しいか、話し手には分からない、つまり、日本語では感情形容詞の使用には人称制限があるため（eg.「*太郎は嬉しい」）、「特に」は使えない。これに対し、(4b)は自分の今日の感情と他の日の感情の対比を表しており、人称制限の問題がないため、不自然にならない。

次に、統語的特徴に関していえば、「特に」は分布の自由度が高く、下記のように、格成分の前、副詞的成分の前、節の前、述語の前、文頭[6]等いろいろな位置に出現し、文の種々の成分をとりたてることができる。これに対し、程度副詞や情態副詞は一般的に、述語の前に位置し、格成分の前や文頭に立つことはあまりない。なお、工藤（1977）にも指摘された通り、「好きな科目は**特に**／*__非常に__数学だ」のように、程度副詞はとりたて副詞の「特に」と違い、「ひ

---

[4] 「Xの世界」のように換えると、範列関係が連想しやすくなり、許容度は上がる。

[5] 「**特に**私が嬉しかったようだ」の形に変えると、人称の制限が解除され、文の許容度は上がる。この現象はとりたて助詞「だけ」等にも見られる。

[6] 文頭に立つ場合、副詞と接続詞の両面的な性格を持つ。工藤（1977)を参照されたい。

っくりかえしの名詞述語に用いられない（p. 976）」。

(5) 男の子は**特に**母親には優しいですよ。（Yahoo!知恵袋）

(6) この状態での暗示は**特に**よく効きます。（『催眠で治す心と体』）

(7) 鵞口瘡 thrush は主として乳児に好発し，**とくに**栄養障害，下痢，発熱などのあるときに発生しやすい。（『内科診断学』）

(8) 同じ浪人仲間でも、二人は**とくに**親しかった。（『若さま黄金絵図』）

(9) 私はだいぶん家庭を犠牲にしてきたな。**特に**今は社会人の二人の子育てには後悔がいっぱいある。（朝日 5/6/1986（小林 1987 より））

ここで注意すべきことは、例えば、(8) のような「特に」が述語の直前に立つ文の場合、「特に」でとりたてている成分は後方の述語ではなく、前方の名詞句であるということである（無論、「特に」は副詞であるため、同時に後方の述語にも関わっている）。このことから「特に」の位置はとりたてられる成分の後ろに移動することができる、言い換えれば、「特に」のとりたての焦点は「特に」の前方に移動することができるといえよう。次の文を見られたい。

(10) その理由として、私立学校が千九百六十年代、昭和三十五年以降**特に大変**増加をいたしまして、…後略…（『国会会議録』）

この文は「特に」は程度副詞ではないことを示していると同時（程度副詞は「*__とても大変__暑い」のように共存できない）、「特に」がとりたてられる成分の後ろに移動しているということも示している。つまり、とりたての焦点からいえば、この文は実質的に「その理由として、私立学校が**特に**千九百六十年代、昭和三十五年以降大変増加をいたしまして」と同じ意味を表す。「特に」のとりたての焦点が「特に」の前に移動することができるからこそ、(5) の文は「男の子」をとりたてる解釈（前方移動焦点）と「母親」をとりたてる解釈（後方焦点）の二通りの解釈が可能である。[7]

4 「特に」のとりたて方

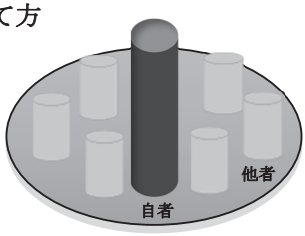

図 1：「特に」の意味図式

先行研究の意味記述を踏まえ、「特に」の意味を上記の図で示しておく。 以下は自者の在り方、集合の在り方、自者と他者[8]の関係の在り方、述語の在り方、特立という範列関係の性質との 5 つの面からそのとりたて方を検討する。

[7] 分布自由性、焦点移動、格成分と述語の両方に関わる等の特徴は取立助詞にもある。
[8] 自者とはとりたてられているものであり、他者とは自者と対比されるものである。

4.1 自者の在り方：離散的と尺度的

まず、自者の在り方についてみると、「特に」でとりたてている自者は、典型的には「個物」のようなものである。

(11)暗すぎて教科書の文字が判読できなくなる。**特に**漢文は読めない。（『タイガー・モリと呼ばれた男』）

このほか、「特に」は例えば、

(12)海賊の動きが活発化したのは、中央政府の統制力が衰え、地方分裂の状況を醸しだした南北朝時代、**とくに**正平五年（千三百五十）ごろからである。（『関門海峡』）

のように、時点というような「点」的なものもとりたてることができる。「個物」や「点」は離散的であるという共通の特徴を持っている。これに対し、「量」は尺度（scale）であり、「特に」は尺度的な「量」を修飾しにくい。

(13)*食べた桃は**特に**10個だ。（cf. **少なくとも**10個／10個**だけ**）

このように、「特に」の表す範列関係は尺度的範列関係ではなく、離散的範列関係であると言えよう。なお、言うまでもないが、数量詞は、例えば、次のように、連体修飾節や指示詞等によって限定され、指示性を持つような場合がある。例えば（14）での「最初の10メートル」は「10メートル」という数量そのものではなく、「10 メートルの部分」と置き換えることができ、指示性を持っている。このような場合は、もはや「量（尺度）」として捉えるのではなく、特定の事物、同定可能な「個物」を指示している表現として離散的に捉えられるようになる。このような場合は、「特に」を使っても差し支えない。

(14)100メートル走では、**特に**最初の10メートルが大切だ。

(15)今年の桃のうちでも、**特に**今日買ってきた10個が非常に美味しい。

(16)A組の学生、**特に**｛その3人／彼ら3人｝が非常に優秀だ。[9]

この現象は、限定を表す「ばかり」にも見られる。限定の「ばかり」も例えば、「*3人**ばかり**呼びつけた」[10]のようには言えないが、茂木（2002）等によれば、「その3人**ばかり**呼びつけた」なら言えるという。

4.2 集合の在り方：3以上と3以下

集合の在り方についてみると、「特に」は集合の中から、自者を顕著なものとして際立たせることを表す。そのため、集合内の要素の数は3以上であるほうが落ち着きがいい。

(17) *中田さんは田中さんより**特に**優秀だ。

(18) ??田中さんに比べて、中田さんは**特に**優秀だ。[11]

---

[9] 岩田（2006）によれば、「指示詞＋数量詞」「人称代名詞＋数量詞」は指示物のとりたて機能を持っており、指示物の「個体性」を上げることができる。

[10] もし「ばかり」が限定ではなく、概数量を表す場合なら、この文も可能になる。

[11] 「XはYよりP」と「Yに比べて、XはP」の違いは森山(2004)を参照されたい。

（19）ほかの同期たちと比べて（も）、田中さんは**特に**優秀だ。

（17）（18）の文は、集合の要素の数が 2 であり、自者と他者は 1 対 1 の対立関係をなしている。このような状況では自者を際立たせにくいため、「特に」が使えないように思われる。これに対し、（19）の「ほかの同期たち」は 3 以上の複数の要素があるので、「特に」文の許容度が上がる。

4.3 自者と他者の関係の在り方：他者肯定、他者否定と他者不問

自者と他者の関係の在り方についてみると、「特に」は他者肯定型のとりたて副詞に位置づけられると考える。他者肯定とは、「自者～述語句」に対して、「他者～述語句」という文が表す事柄も真であるという意味である[12]。つまり、「自者がこうである。他者もこうである」というように、述語句の表す事柄に関して、自者と他者が同一傾向にあるということを指す。

工藤（1977）では特立のとりたて副詞は「対象の語句をコレハと排他的にとりたてる場合も、コレコソガと指定的にとりたてる場合もある」と指摘しているが、「特に」に「排他」という意味はないと考える。次の例を参照されたい。

（20）家族には、**特に**姉には申し訳ないけれど、彼だけが心の支えだった。（『生きてるってシアワセ！』）

Test 1 { a 家族には、**特に**姉には申し訳ない。もちろん、母にもとても申し訳ないけど。
b*家族には、**特に**姉には申し訳ない。姉以外の家族には申し訳ないと思わない。

Test 2 *家族には、**特に**姉に**だけ**申し訳ない。[13]

また、「こそ」とも意味が同じとは言えない。「こそ」も特立のとりたてに分類されているが（沼田 2009 等）、「こそ」は「特に」とは異なり、他者不問型（他者がどうであるかは問題にしない）の語である（青木 1993、庵 2001）。そのため、「こそ」は他者を肯定することも（「病弱な人にも必要だが、日頃元気な人に**こそ**定期的な検診が必要だ。（沼田 2009）」）、他者を否定することも（「病弱な人には必要でなく、日頃元気な人に**こそ**定期的な検診が必要だ。（沼田 2009）」あり得る（庵 2001、沼田 2009）。他者を否定する場合、「こそ」は「特に」と置き換えることも共起することもできない。

（21）*病弱な人には必要でなく**特に**日頃元気な人に定期的な検診が必要だ。

（22）*病弱な人には必要でなく**特に**日頃元気な人に**こそ**定期的な検診が必要だ。

BCCWJ においては「特に」と「こそ」が共起する例は僅か 14 例である。両者が共起できるのは（23）のように、他者を肯定する時のみと考える。なお、両

---

[12] 他者肯定・他者否定は述語が否定述語であるか否かとは関係がない（沼田（2009））。

[13] BCCWJ では「いまちょうど日本もそうでございますし、世界もそうでございますが、石油ショック後の経済変動の調整下にあるわけでございまして、**特に**日本**だけ**について申し上げますと、民間の資金需要はまだ低迷いたしておるわけでございます」といったような例文があるが、この文における「特に」は「だけ」に関わっているわけではなく、［特に、［日本だけについて申し上げますと］］という構造となっている。

者の共起の例が極めて少ないという現象は、他者不問型の「こそ」は理論上他者を肯定することも否定することもあり得るが、実際の使用傾向では他者を否定するほうが多いということを示していると言えよう[14]。このためか、「こそ」を他者否定型のとりたて表現と見なす研究もある（寺村 1991）。いずれにせよ、「こそ」と「特に」が表す特立の性質はかなり異なる。そのため、「こそ」は「私のほうこそすみませんでした」のような集合の数が 2 である文においてその一方だけを取り上げる用法でも用いられるが、「特に」はそれができない。

（23）船長と経営者は、どのような場面でも、特に環境が厳しいときにこそ、ビジョンを掲げ続けなければならない。（『企業再生の人事戦略』）

4.4 述語の在り方：認知的際立ち性による「とりたて」と「程度」の連動

以上では「特に」は自者も他者も P(predicate)であることを表す他者肯定型の副詞であるということについて見た。それだけでなく、「特に」は特立という語義の関係で自者の述語の属性が他者より顕著であることを要求する。つまり、「自者も他者も P であるが、自者は他者より顕著に P である」という方法で自者を際立たせ、これにより特立の意味が実現する。これを仮に「同一極性の属性の強化」と呼ぶことにする。このことは以下の文から確認できる。

(24)a 皆多かれ少なかれ心配している。特に彼は非常に心配している。

b*皆非常に心配している。特に彼は多かれ少なかれ心配している。

この文から分かるように、「特に」の自者は他者と同傾向にありながらも、他者より述語句の属性の程度が高いことが要求されている[15]。これは「自者は他者より顕著に P である」ということで、自者と他者の比較が含意されているためである。自者と他者の比較が含意されていない他者肯定型の副詞、例えば、「例えば」「おまけに」等は高程度であることを示す効果をもたらさない。なお、「特に」でとりたてているのが高程度のもののほうであるということは、言い換えれば、「特に」の自者の属性には認知的際立ち性（salience）があるということにもなる。これは「特に」における「他より顕著である」「集合の中から顕著なものを取り上げる」という語の意味から要求されている。このことは以下の文から確認できる。

(25)数学の成績は特に｛悪い／*まあまあだ／*人並みだ／優秀だ｝。

このように、「特に」は程度副詞ではないが、特立という語義の関係で、程度と連動しており、二次的に、高程度という効果をもたらしている。特に、述語の直前に立つ場合、その述語が何らかの程度性を帯びることが多い。まったく程度性を持たない述語の直前には「特に」は使われにくい。

(26)*この本は特に無料だ。（cf.この本の値段は特に高い）

---

[14] 両者の共起の例が少ないのは構文制約の違いにも影響されている可能性がある。なお、「こそ」が他者を否定する場合と肯定する場合の例文数の調査は今後に譲る。

[15] 本稿でいう属性は広義の属性、即ち、アドホックな文脈属性(Ad hoc Attributes)を指す。

(27) *彼女は**特に**｛病人／学生｝だ。（cf.彼女は**特に**美人だ）

程度性のほかに、量が多いという効果ももたらす。まったく量性を持たない述語の直前には「特に」は使われにくい。

(28) a みんなも進んだが、彼は**特に**進んだ。

b*彼は**特に**立ち止まった。

4.5 特立という範列関係の性質：情報共有の可能性と主観・客観の問題

最後に、特立という範列関係の性質について検討する。次の文を見られたい。

(29) ここは**特に**静かに利用するための閲覧室です。

This room is aimed for SPECIFICALLY QUIET USE.（早稲田大学図書館）

(30) *ここは｛**とても**／**非常に**｝静かに利用するための閲覧室です。

(29) は早稲田大学の図書館に貼ってある注意書きである。早稲田大学では図書館のエリアを「active area」「quiet area」「silent area」「super silent area」との４つに分けており、この中の「super silent area」で上記のように記されている。この文における「特に」を (30) のように、「とても」「非常に」等のような典型的な程度副詞に置き換えると、不自然になってしまう。これは、「とても」「非常に」等のような典型的な程度副詞で表す程度は主観的な基準による判断であり[16]、つまり、何 db. の騒音値を「｛とても／非常に｝静かだ」と判断するかは人によってそれぞれであり、他人と共有しにくいため、客観的な注意書きとして不適切だからである。これに対し、「特に」の場合、その本務は程度を表すことではなく、「ここは他のエリアより静かだ」「他のエリアと比べて、ここは特別に静かにするエリアだ」というように、「ここ vs. 他のエリア」という比較関係を表す。そして、こうした比較関係は共有できる。特立という範列関係は客観世界の個物の間の相対的関係であり、客観世界の個物の間の相対的関係は他人と共有できる情報だからである。このことは「特に」だけでなく、次のような客観的範列関係を表す語でも同様に見られる。

(31) これ**より**辛いカレーを買ってきてください。

(32) **一番**辛いカレーを買ってきてください[17]。

(33) **もっと**正直に言ってみたまえ[18]。（『人間の壁』（工藤 1983：114）より）

---

[16] 工藤 (1983)、(2000) ではこれらの程度副詞の程度性の裏面には評価性が潜んでいると指摘している。本稿でいう主観的な基準による判断は工藤のいう評価性と基本的に同じことを指すように思われるが、評価性という言葉が示す範囲は広すぎて、研究者によって異なる場合があり得るため、本稿では評価性という言葉を使わないことにする。

[17] 「一番」を程度副詞とする研究もあるが、予め順序性・範列性が設定されていることを含意する「一番」はその順序性・範列性を他人と共有することが可能である。

[18] 比較関係は客観的なものと主観的なものがある。「もっと」は「X と Y の客観的な関係を表す」（佐野 1998：103）が、「ずっと」「よっぽど」等は話し手の予想との比較を表し、主観的評価性を持つとされている。詳細は渡辺 (1986) 等を参照されたい。

なお、工藤(1983)、(2000)で指摘された、「とても／非常に」等の典型的な程度副詞は命令、依頼、勧誘等に使えず[19]、特立のとりたて副詞はこれらの文に比較的自由に用いられるという点も共有の可能性に由来すると考えられる。[20]

(34)*<u>とても</u>ゆっくり歩きませんか。（工藤 1983：113）

(35)親指は<u>とくに</u>よくもんでください。(『速効！顔のツボ』)」

(36)この場合は<u>特に</u>皮目を強く焼いて下さい。（『ごちそうものがたり』）

森田(1989)は「特に」は話し手の主観的な判断を表すと指摘するが、「とても／非常に」等の程度副詞と比べた場合、「特に」は程度をそのまま表すのではなく、程度における相対的関係として述べているため、他人との共有可能性がある。共有可能という点で考えると、「特に」は寧ろ客観的、少なくとも、「とても／非常に」のような典型的な程度副詞よりは客観的であると言えよう。

5 「特に」と否定文

「特に」は肯定文にも否定文にも使用できるが、否定文に用いられる場合については、二義性の問題がある。以下の文を見られたい。

(37)この本は<u>特に</u>面白くない。

a ［特に［面白くない］］（Wide Scope）　→同一極性の属性の強化
b ［［特に面白く］ない］（Narrow Scope）→部分否定

この文は2通りの解釈があり得る。一つは、(37a)のように、「特に」のとりたてのスコープが否定のスコープより広い、Wide Scope という解釈である。この場合、否定の部分は一つのまとまった属性として捉えられ、「他の本もあまり面白くないが、この本は特に面白くない」というように、同一極性の属性の強化の意味になる。もう一つは、(37b)のように、「特に」のとりたてのスコープが否定のスコープ内に含まれるという Narrow Scope の解釈である。この場合は「この本は特に面白いというわけではない」「この本は特に面白くはない」という部分否定的な意味になる。どの解釈になるかは文脈によって決まる。

なお、後者の Narrow Scope の解釈をとる場合は否定の叙法副詞「別に」との類似性が見られる。また、「特に」が「いえ、特に」のように、否定の応答表現として使うことができるという点にも「別に」との類似性があると考えられる。工藤（1983）では「別に」を現実認識的な叙法副詞と位置づけ、その中の「否定―とりたて」の類に分けている。では、否定文に出現するとりたて副詞

[19] 真実性を表す「本当に／実に／誠に」や現場性を持つ「ただただ」も他人と共有しにくいため、依頼・命令の文や WH 疑問文に使えない。「本当に」等と程度の関係は市村(2019)、工藤（2016)を、「ただただ」と程度の関係は呉（2021）を参照されたい。

[20] 工藤(2000)では、特立のとりたて副詞が命令文等に使える理由は、これらの副詞が「名詞句の取り上げ方とでもいった（文の二次的間接成分的な）用法のもの」であるためという考え方を示しているが、この説明だけでは不十分だと思われる。例えば、とりたて助詞は基本的に名詞句の取り上げ方を表すが、命令文で使えないものもある。

ととりたて性を有する否定の叙法副詞とはどう違うのだろうか。以下、主に統語的特徴に注目し、そこから叙法副詞としての「別に」ととりたて副詞としての「特に」の性質の違いについて分析する[21]。まず、「は」の後接可否及び否定との関係について見てみる。

(38) a 反省点はありますか？　木村　うーん、特にはありませんが、やっぱり苦労したのは屋根ですね。（『狭くて小さいたのしい家』）

b* うーん、別にはありません。

上記の例文から分かるように、「特に」では「は」の後接が可能であるが、これに対し、「別に」ではそれができない。これは両者における否定との関係が異なるためである。叙法副詞の「別に」は否定と呼応している。このため、「は」の後接が不可能である。この現象は「あまり」や「決して」等にも見られる（原田 1982）。これに対し、「特に」は否定と呼応しているわけではなく、否定のスコープ内にある。先ほど否定文における「特に」には二義性があると述べたが、「は」を後接させると、Narrow Scope（部分否定）の解釈しかできなくなる。このように、「特に」に後接する「は」は否定の範囲を明示する機能を示している。このことは、以下のように、文の後ろに否定されて残ったものの文脈を補足することでさらに明らかになる。

(39) ―この論文について何か意見がありますか。

―特に（は）ありませんが、漢字の間違いがいくつかありました。

cf.* 別にありませんが、漢字の間違いがいくつかありました。

「特に」では否定の範囲を自者に限定し、否定して残されたのは他者である。「とりたてていえる点はないが、いくつか小さな点がある」というような意味になる。これに対して、否定と呼応している「別に」は「は」で否定の範囲を明示することはない。この点、「｛全部／*まったく｝は～ない」の現象と類似性があるとも言えよう。

次に、文における階層性からみると、叙法副詞の「別に」は命題外の副詞であり、とりたて副詞「特に」は命題内の副詞である。以下の文を比較されたい。

(40) a 今日は別に暑くない。【命題内容＝今日は暑くない】

b 今日は特に暑くない。【命題内容≠今日は暑くない】[22]

(40a) の「別に」文の場合、命題内容から言えば、「今日は暑くない」と同じであるが、(40b) の「特に」文はそうではない。このように、命題外の副詞「別

[21] 森田 (1989) では両者の違いについて、「別に」には「普通と同じ」、「特に」には「他と著しい格差がある」という意識があると指摘する。しかし、「特に」が否定文で使われる場合、結果的に「別に」と同様、「普通と同じ」ということになると考えられる。

[22] この文はもし Wide Scope の解釈をとるなら、【命題内容＝今日は暑くない】になる。前述のように Narrow Scope の「特に」は「別に」と類似性があるため、この部分では Wide Scope ではなく、Narrow Scope の「特に」と「別に」の区別について検討する。

に」は命題内容の増減をもたらさない。これに対し、命題内の副詞「特に」は命題内容の増減に関与している。そのため、次のような命題内容の増減を問題にしていない文脈では「特に」を使うことができない。

(41)—「息子がご迷惑をかけて申し訳ありません」

—「いいえ、*特に／別に」

また、命題内のとりたて副詞「特に」は命題内部の具体的な範列を要求するが、命題外の副詞「別に」は命題内部の具体的な範列を要求しない。例えば、前記（40b）の「特に」文は「今日の気温」と「他の日の気温」という具体的な範列を内含している。これに対し、（40a）の「別に」は「今日は暑い」という予想や相手の主張に対する否定を表している。命題外の副詞「別に」は以下のように、命題内の具体的な範列を持たない文でも使える。[23]

(42)世界は別に広くない。(cf. *世界は特に広くない)

最後に、命題外の副詞「別に」は発話行為的という特徴を持つ。前記の(38)の「特に」は「特別な反省点はない」、つまり、「特別な個物の不在」を表しているが、これに対し、「別に」は「特別に言いたいことはない」「とりたてて言うほどのことはない」「特別な話題ではない、わざわざ取り上げる必要はない」という発話行為的な意味を表すこともできる。この点は以下の文を参照することでさらに明らかになる。

(43)a （息子に）「テスト、どうだった？」「べつに」（飛田 2018：469）

b*（息子に）「テスト、どうだった？」「特に」

なお、「別に」の上記の特徴はまた、「重要なことではない」と話者が考えていることを示す。そのため、「別に」は次のような文では使用できない。

(44)*「あなた、人を殺したでしょ？」「別に」

工藤(1982)ではとりたて副詞を、叙法副詞、評価副詞と共に陳述副詞に分けている。意味からみれば、とりたて副詞は対象語句の取り上げ方を表す点では（広義の）陳述性を有すると言ってもいいが、統語的にみれば、「特に」のようなとりたて副詞は命題内の副詞であって、叙法副詞、評価副詞とはかなり性質が異なり、この三つを同じく陳述副詞に位置づけていいものか、疑問が残る。

6 おわりに

本稿ではまず、意味と統語の観点から「特に」がとりたて副詞であることの根拠や認定方法について考察した。その上で、「特に」の意味・構文特徴を検討し、程度副詞や「こそ」と比較しながらそのとりたて方を明らかにした。さ

[23] 副詞の語順からみると、BCCWJ には「特に別に～」のような例はないが、「別に特に～」は 1 例あった（「べつにとくに楽しくはないです」と僕は言った。（『ノルウェイの森』））。このことから、命題外の副詞「別に」は命題内の副詞「特に」の内側に位置するよりも、その外側に位置するほうが許容度が上がる可能性があると推測できるが、BCCWJ の例文数が 1 例のみのため、慎重を期してここでは語順をその証拠としない。

らに、「特に」と否定の叙法副詞「別に」の関係についても分析した。なお、「特に」と類義語の「殊に」等の違いについての分析は今後の課題とする。

【参考文献】

青木三郎(1993)「『取り立て』解体論」『個別言語学における文法カテゴリーの一般化に関する理論研究』(平成４年度筑波大学学内プロジェクト研究成果報告書),1-40

安部朋世(2006)「副詞トクニ・コトニ・トリワケの分析」『千葉大学教育学部研究紀要』54,217-222

庵功雄［ほか］(2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

市村太郎(2019)「副詞『ほんとうに』の展開と『じつに』『まことに』：近代語から現代語へ」『国文学研究』188, 112-98

岩田一成(2006)「日本語数量詞の代名詞的用法と場指示語」『日本語文法』6(1), 38-55

工藤浩(1977)「限定副詞の機能」『国語学と国語史』明治書院,969-986

工藤浩(1982)「叙法副詞の意味と機能」『国立国語研究所研究報告集 3』,45-92

工藤浩(1983)「程度副詞をめぐって」渡辺実［編］『副用語の研究』明治書院, 176-198

工藤浩(2000)「副詞と文の陳述的タイプ」『日本語の文法 3』,164-231 岩波書店

工藤浩(2016)『副詞と文』ひつじ書房

呉慶霞(2021)「排他的限定のとりたて副詞『ただ』とその重複形」『国文学研究』193, 179-162

小林典子(1987)「序列副詞−「最初に」「特に」「おもに」を中心に−」『国語学』151,15-29

佐野由紀(1998)「比較に関わる程度副詞」『国語学』195,99-112

寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版

日本語記述文法研究会(2009)『現代日本語文法５ とりたて・主題』くろしお出版

丹羽哲也（1997)「現代語『こそ』と『が』『は』」『日本語文法』ひつじ書房, 125−140

沼田善子(2009)『現代日本語とりたて詞の研究』ひつじ書房

原田登美(1982)「否定との関係による副詞の四分類」『国語学』128, 138-122

飛田良文・浅田秀子(2018)『現代副詞用法辞典（新装版）』 東京堂出版

茂木俊伸(2002)「『ばかり』文の解釈をめぐって」『日本語文法』2(1), 171-189

森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店

森山卓郎(2004)「日本語における比較の形式」『言語』33(10) ,32-39

渡辺実(1986)「比較の副詞」『学習院大学言語共同研究所紀要』88,65-74

【使用データ】国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) 中納言

【謝辞】執筆に際し、指導教官の森山卓郎先生はもとより、松木正恵先生・山田昌裕先生・郭蓉菲先生及び査読者の方々にも数多くのご助言を賜った。氏家洋子先生・山岡華菜子先生と LA の久賀朝氏は例文の議論に辛抱強くお付き合い下さった。記して感謝申し上げる。また、調査にご協力頂いた学部生の方々、活発な議論を交わした森山研究室の皆様にも心より御礼申し上げる。無論、本稿の誤りや不備は全て筆者の責任である。

―ご けいか 早稲田大学大学院文学研究科・博士後期課程―